



羅針盤

浅野 善英

Yoshihide Asano

東北大学大学院医学系研究科 神経・感覚器病態学講座 皮膚科学分野 教授



2つの強皮症 ～このキャッチコピーにこだわったわけ～

全身性強皮症 (Systemic sclerosis : SSc) の臨床と研究に携わるようになって 25 年が経過した。今年で 50 歳を迎えたので、人生の半分をこの病気に捧げたことになる。が、当初から「全身性強皮症」という日本語病名に違和感を覚えていた。大学院に入学後、SSc 関連の英文論文を執筆するようになったが、その書き出しは先輩方の論文を真似た定型文だった。“Systemic sclerosis, or scleroderma, is a multisystem autoimmune disease characterized by fibrosis of the skin and various internal organs”である。つまり、“systemic sclerosis = scleroderma”と理解した。その数年後、皮膚硬化がない SSc 症例に遭遇した。このような一群を“systemic sclerosis sine scleroderma”とよぶことを知った。ちょっと待てよ、“systemic sclerosis=scleroderma”だとすると、“systemic sclerosis sine scleroderma”は何にもなくなっちゃって健康人になっちゃうじゃん！と矛盾に気づいた。結局のところ、DLE と同じように状況に応じて解釈を変える必要があるのが“scleroderma”という用語と理解した。

そもそも“systemic sclerosis”にはいろいろな訳語があてられている。私の恩師の故・尹 浩信先生は「汎発性強皮症」を好んでおられ、その影響もあり 2009 年までに私が書いた日本語論文ではこの病名を用いていた。佐藤伸一先生が東京大学に赴任されてからは、「全身性強皮症」を用いるようになった。自分の柔軟性に我ながら感心するが、その背景には「いずれの病名にも違和感を覚えていた」という事実がある。10 年ほど前、リウマチ科領域で SSc の第一人者とされる先生から「汎発性硬

化症」が本来の日本語訳だと伺った。一方で、SLE が「全身性エリテマトーデス」なら SSc は「全身性硬化症」かな、と密かに思っていた。東北大学に赴任して 1 年半、この間に医局員が書いてきた英文論文はほぼすべてで“systemic scleroderma”が使用されていた。最近、DeepL という翻訳ソフトの影響であることを知ったが、この英語病名に医局員がまったく違和感を覚えないこと自体、東北大学が SSc にナイーブであることの証左にほかならない……。それはさておき、SSc の日本語病名が今後どうなるのか、興味深いところである。

一方、localized scleroderma といえば、限局性強皮症である。DeepL も誤訳はしない。きっとこの病名は今後も変わらないだろう。何年先になるかわからないが、「強皮症」といえば限局性強皮症、という時代がくるのかもしれない。SSc に比べると注目されることは少なく、常に影の存在だった限局性強皮症だが、2021 年には小児慢性特定疾病に認定され、徐々に疾患認知度が上がり、SSc を追隨するように国内外で診療ガイドラインの整備が進み、標準治療の議論が進められている。

本企画では私のライフワークである「2つの強皮症」にスポットを当てたい。いつまで「2つの強皮症」とよべるかわからないが、その意味でも今回はこのキャッチコピーにこだわって企画を立案した。そして幸い、この領域のエキスパートの先生方に執筆をいただくことができた。ご執筆いただいた先生方に心より感謝申し上げます。本誌が読者の先生方の日常診療にお役立ていただけるとともに、「2つの強皮症」がより注目されるきっかけとなれば幸甚である。